

【長崎】3歳で判明した重度難聴、小中高と普通学校で学び医療の道へ-吉田翔・日本赤十字社長崎原爆病院医師に聞く◆Vol.1

「先生も人工内耳ですか」自身の存在が当事者や家族の希望に

2026年9月21日（月）配信 m3.com地域版

長崎市の日本赤十字社長崎原爆病院で耳鼻咽喉科医として勤務する吉田翔氏は、自身も生まれつき両耳100dB以上の重度難聴の当事者でもある。3歳で先天性難聴と判明しながらも病院での療育や両親の発音訓練を積んで言語獲得し、聴覚活用で周りに支えられながら、小中高を普通学校で過ごしたという。臨床検査技師の国家資格を取得後、26歳で医学部へ進学するという異色の経歴を持つ吉田氏に、当事者としての半生と、それが今の診療にどう活かしているかを聞いた。（2026年8月7日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）

▼第3回は[こちら](#)（近日公開）



吉田翔氏（c）NPO法人 前庭水管拡大症・バンドレッド症候群の会（ZENPE）

普通小学校に入るために、母と取り組んだ発声訓練

——吉田先生は3歳の時に難聴と診断されたそうですが、小中高と普通学校に通われました。なぜご両親は普通学校という判断をされたのでしょうか。

まず、私が生まれた1984年は、新生児の聴覚スクリーニング検査がまだ普及していなかった時代です。難聴の発見が遅れるケースも多く、私自身も兄の耳鼻科受診に付き添った時に聴こえの反応が悪いと指摘され、精密検査をしたところ、両耳100dB以上の先天性難聴と診断されました。

そんな私が普通学校へ進学した背景には「健聴者の中で『聞こえない』という問題点を自分で解決できる」といった社会性を身につけてほしい」という両親の考えがあったと聞いています。年中の1年間だけ佐賀県立ろう学校の幼稚部に通いましたが、年長からは普通幼稚園に転園。ろう学校の先生方からは心配の声もあったようですが、ろう学校側の指導や転園先の手厚いサポートと補聴器の調整を担ってくれていた佐賀大学病院耳鼻咽喉科医や言語聴覚士のおかげで、無事に卒園することができました。

——小学校入学に向けては、言葉の面でも大変なご苦労があったそうですね。

現在は分かりませんが、当時、普通小学校に入るには、クリアすべき語彙力のノルマがあり、それをクリアするために言葉や発音の習得は簡単ではありませんでした。そのため、自宅では母と一緒に毎日1時間、絵日記や発音訓練などを行っていました。

そんな母との発声訓練で印象的だったエピソードがあります。当時の私が発声でつまづいていたのがサ行とタ行でした。口の形がほとんど同じであり、補聴器でも聞き取りが困難だったため、音としての違いが判らなかったのです。言語聴覚士の指導もありましたが、なんとなく真似をしているだけでした。

そこで母が考えたのが、ろうそくの火を使ったユニークな訓練でした。ろうそくの火に向かって「サー」と言うと火が大きく揺れ、「ター」と言うとほとんど揺れない。それを実際にやって見せてくれたことで、初めて音の違いを理解できたのです。ただ、訓練はスパルタ式で、今の時代であれば、「厳しくしすぎると話す楽しみを失ってしまいますよ」と言われていたかもしれません。



幼少期に訓練で使用していた絵日記

臨床検査技師の資格取得後、26歳での医学部合格

——医師を目指したきっかけは何だったのでしょうか。

実は、高校まで医師という選択肢は全く考えていませんでした。医学の道へ進んだのも、ある人気ゲームで遊んでいるうちにウイルスや細菌培養に興味を持ったことがきっかけです。臨床検査技師を志し、高校卒業後は九州大学医学部保健学科に進学しました。

自分にとって雲の上の存在だった医師という仕事を意識するようになったのは、大学4年生の夏休み。佐賀県こばを育む親の会が主催する講演会で講師を務めたことがきっかけでした。

正直、人生で初めての経験でしたし、「一介の当事者でしかない私の話を聞いてくれる人なんていないだろう」と考えていましたが、予想以上に多くの方が来場され、質疑応答も多かったのです。こんな自分でも必要とされていると実感する一方で、自分の経験を話すことしかできず、「医療の知識を身につければ、もっと説得力のある話ができるはず」と思うようになりました。

折しも2001年の医師法改正で絶対的欠格条項が廃止され、聴覚障害があっても医師を目指せるようになっていたことから、大学卒業後の医学部進学を決意したのです。

——臨床検査技師の国家試験と医学部医学科の受験。この両立は大変だったのではないですか。

はい。大学4年の後半は国家試験の勉強、病院実習、卒業論文を進めながら編入試験の対策もしていたので、大学にほぼ泊まり込みのような生活でした。臨床検査技師をあきらめることも考えたのですが、親に学費を払ってもらって

いましたし、万が一、医師になれなかった場合の保険にもなると思い、必死に両立させました。

無事、臨床検査技師の国家資格には合格しましたが、医学科編入試験は不合格。浪人してもう一度挑戦しましたが、また不合格。「次で駄目だったらあきらめよう」と背水の陣で猛勉強し、一般受験に切り替えた結果、26歳で佐賀大学医学部医学科に合格することができました。

——数ある診療科の中で、耳鼻咽喉科を選んだ理由を教えてください。

最初は小児難聴に関わりたいたいという思いから小児科を志望していました。しかし、小児科はあらゆる疾患を幅広く診る必要があり、小児難聴に特化して関わることは難しいと気づいたのです。その点、耳鼻咽喉科であれば聴覚そのものに深く関わり続けられると考えて進路を切り替え、2018年に長崎大学病院の耳鼻咽喉科・頭頸部外科に入局しました。

聴覚障害があることを不安要素に思われぬように、どんな仕事でも積極的に引き受けていました。せっかく苦労して医師になったのに、「あいつは聞こえないから」と仕事を任せてもらえなくなるのは嫌でしたし、少しでも早く一人前になりたい一心だったのだと思います。

ただ、同期がいなかったので1年目から一人で仕事を引き受ける場面も多く、医療用語や略語が全く分からず、大変な場面も経験しました。でも、その分、数多くの症例を任せてもらい、医師としての基礎を鍛えることができたと感じています。



手術を執刀する吉田氏

当事者としての経験が、今の診療に生きている

——吉田先生は専攻医としてのスタートが33歳。オールドルーキー的な存在だったと思うのですが、耳鼻咽喉科医としてどのような経験を積んで来られたのでしょうか。

長崎大学病院、長崎みなとメディカルセンター、佐世保市総合医療センターなど、医局関連病院を転々としながら耳鼻咽喉科医としての腕を磨きました。2024年から現在の日本赤十字社長崎原爆病院の耳鼻咽喉科に所属し、一般外来や補聴器外来、手術といった診療に従事しています。

ちなみに、私は医師になるまでは左耳の補聴器だけで生きてきました。ただ、耳鼻咽喉科医として働く中で、周りの医療スタッフや患者さんとのコミュニケーション精度を上げる必要があると感じ、恩師の勧めもあり右耳にも補聴器をつけました。その後、聞こえが悪くなったため、2023年に人工内耳を入れ、日々の診療に臨んでいます。

——難聴の当事者であることが、日々の診療の中で活着していると感じることを教えてください。

「聞こえない」「耳鳴りがつらい」といった当事者にしかわからない部分を体感しているので、患者さんからの共感を得やすいと感じています。突発性難聴などで大人になってから聞こえが悪くなった方の中には、インターネットで調べて市外から足を運んでくださる方もいます。

あとは聴覚障害児を持つ親御さんの精神的なケアでしょうか。知識がない中で我が子をどう育てて良いかわからず、身近に同じような境遇の人と出会う機会もないので、先行き不安に感じている親御さんは少なくありません。だからこそ、先天性難聴であっても医師になったというロールモデルが身近にすることで、「この子を信じて頑張れば大丈夫」と感じていただけているのではないのでしょうか。

実際、診療をしていると「先生も人工内耳をしているんですね」とホッとする方もいらっしゃいますし、「先生が頑張っているのが励みになる」という言葉をいただくことも多いです。ずいぶんと遠回りをしてたどり着いた耳鼻咽喉科医という職業ですが、これからも当事者として患者さんに寄り添える診療を続けていきたいと思います。

◆吉田 翔（よしだ・しょう）氏

2008年に九州大学医学部保健学科を卒業し、臨床検査技師の資格を取得。医師を志し2010年に佐賀大学医学部へ入学。2016年同学部卒業後、NHO佐賀病院での初期研修を経て、2018年に長崎大学病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科に入局。長崎みなとメディカルセンター、佐世保市総合医療センターなどを経て、2024年より日本赤十字社長崎原爆病院耳鼻咽喉科に所属。耳鼻咽喉科専門医、補聴器相談医、臨床研修指導医。

【取材・文＝小森大悟（写真は吉田氏提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索